

# 湘勇解散をめぐる諸問題

浅 沼 かおり

はじめに

第1節 湘勇の解散

第2節 哥老会

第3節 淮勇

第4節 緑營

おわりに

## はじめに

同治3年6月に太平天国の都・天京を陥落させた曾国藩だが、その後も積年の悪夢にうなされ続けた\*1。

数十年來、夜によく、小河浅水を舟で進む夢を見る。しばしば座州〔膠浅〕する。ときには陸地の村の小道を舟で行く。いつも世を渡る困難の兆しとわかる。今夜は舟に乗って山に登る夢を見た。その困難はまた前より甚だしい。非常に心配である（同治5年12月24日）\*2。

南京（金陵）奪還後、息つく間もなく捻軍征討の命を受けた曾国藩は同治4年5月、「金陵奪還後、人は〔私が〕佳境に入ると思っており、日々苦境〔愁城〕にあることを知らない」\*3と洩らしている。同治6年1月に、范蠡・張良に例えられたときも、「お手紙に范蠡、子房〔張良〕のような状況と書いてあったのは、これまた特に小生の気持ち〔鄙衷〕がおわかりでない。彼ら二人は功成って退いたのであり、鳥尽きて弓しまわれたのであるが、僕は捻軍征討にまだ成功せず、境遇もまた二氏とは比べものにならない」\*4と曾国藩は返信している。

太平天国平定後の曾国藩を悩ませた事情は多岐にわたるが、本稿では、湘勇の解散をめぐる諸問題を、李鴻章の淮勇との関係を交えながら考えてみたい。本来はさまざまな側の史料を参照して立体的に検討しなければならないが、本稿では一つの準備作業として『曾国藩全集』\*5に収められた曾国藩自身の記述を整理してみたい。

清水稔氏は、南京奪還後の湘勇解散の理由として、草創期の活力を失ったこと、軍餉（兵の給料と軍隊の費用）の欠乏、給与の遅配・欠配、将官のピンハネ、曾国荃とその将兵によ

る略奪への批判増大などを挙げたあと、次のように指摘する。

しかしなによりも官軍の戦闘力をこえる私兵軍団を擁し、最高の官位にある漢人曾国藩にとって、帝位をねらう野心ありとみられることを懸念した結果であったためといえる。かつて湖北巡撫代理の任命を取り消された裏には、朝廷内部で帝位篡奪の嫌疑をかけられていたこと、巷でも秘かに猜疑のまなざしが向けられていたこともあった。おりにふれ自ら爵位の返上を申し出たり、两江総督の就任を固辞したり、軍務の一部を返上したのも、そのあらわれであろう。それは、曾国藩の人生観・学問観として、「盈<sup>み</sup>つれば虧<sup>か</sup>くる」という天命にたいする畏敬の念が強くあったことに由来する。これは一方では、一種の保身の術であるといえる\*6。

王盾氏によれば、南京奪還後、曾国藩は

朝廷が主に目指しているのは依然として「満漢大防」であり、湘軍軍事政治集団の実力が膨張し、清朝政権の継続を脅かすのを防ぎ始めたことを知った。(中略)唯一の方法は、湘軍の大解散[大遣撤]である。まず曾国荃の、南京を占領した嫡系部隊を大量に削減[裁撤]した。一気に5万人近く削減[裁撤]したのである。(中略)湘軍は最盛期には55万だったが、40万あまりが減らされ、残るは10万足らずになった。こうして、満蒙貴族集団の張りつめた弦はゆるみ、制御できない湘軍という脅威への懸念が除かれ、満蒙貴族集団と湘軍軍事政治集団のあいだの一触即発の矛盾は緩和され、湘軍軍事政治集団の実力は低調に転じた\*7。

朝廷の疑念を恐れた曾国藩が湘勇解散を敢行したというのはそのとおりだと思うが、それを示す言葉を曾国藩が遺した文章に見出すことは殆どない。曾国藩は、その思いを文字にしたことは一度もなかったかもしれない。『全集』におさめられた膨大な日記や手紙から強く感じられるのは、それらの文章の公的な性格である。誰かが読むもの、そして文字として残るものに、最も重要なことは決して書かれなかったのではないだろうか。それらは心許せる相手との直接の会話\*8のなかで語られたであろう。さらに、ついに一度も口に出されず、棺まで持っていかれた真実もあっただろう。

同治3年6月以降の「書信」のなかに一箇所、上述の曾国藩の危惧を示唆する言葉を見つけた。同治5年10月、捻軍討伐のさなかにあった曾国藩は欽差を辞すことを切望し、散員(実務をもたない役員)として軍営に残り、「湘・淮の軍心をつなぎ、湖北・江蘇の血脈を通じる[維湘、淮之軍心、通鄂、蘇之血脈]」\*9ことに力を尽くしたいと言っていた。この「軍心をつなぐ」という言葉が人の誤解を生んだらしく、曾国藩はあわてて(?)釈明している。

お手紙に、軍心をつなぐという言葉は、権臣となるのを惧れるという平素の考えと矛盾しており、まことに理解しがたいと書いてあった。権臣が人心を得るのを悪むというのは次のようなことである。魏晉以降、都督や中央・地方の諸軍が大いに非望を抱き、唐末・五代には人心〔衆心〕を得た節度使〔方鎮〕が、しばしば帝位を奪い、おそるべきものであった。宋代は陳橋の変〔これにより後周が滅び宋が建国された〕に鑑み、将帥で軍心を得たものは、とくに疑われた。北宋の王武恭〔王徳用〕、狄武襄〔狄青〕はいずれも正人に弾劾され、重用されなかった。南宋の秦氏〔秦檜〕もまた、軍心が帰附したので急ぎ張〔浚〕・韓〔世忠〕・劉〔光世〕・岳〔飛〕の兵権を解いた。これ以後、老将が大いに軍心を得て国を傾けるのを聞かず、疑いを招いたのを聞かない。我が朝が寛大誠明であることは、いにしへの比ではない〔度越前古〕。〔曾〕国藩、左〔宗棠〕、李〔鴻章〕はしばしば数万の勇を募り、提督・総兵〔提鎮〕に推薦〔保薦〕した者は千、百の単位だが、朝廷は全く猜疑せず、僕らもまた避けるべき疑いを知らず、平然として、魚が江湖を忘れるごとく、足にぴったりなので靴を忘れるごとく、腰にぴったりなので帯を忘れるごとくであった。国藩が以前言った権臣となるを惧れるというのは、心のあり方、行動の仕方が隣省を凌駕するのを恐れるというに過ぎない。のちに言った軍営に留まって軍心をつなぐというのもまた知らず知らずのうちに感化する〔黙運潜移〕というに過ぎない。霆軍〔鮑超の軍〕と湘軍を、少荃〔李鴻章〕と意気投合させて安心するというだけのことで、絶対に、軍心をたのみに自分の価値を上げる〔自重〕ということではない\*<sup>10</sup>。

上の引用中の「朝廷は全く猜疑せず、僕らもまた避けるべき疑いを知らず」という語には、曾国藩の苦衷が見え隠れする。だが、曾国藩は公私にわたる文中で、上のような慎重な態度を崩さなかった。湘勇を解散しなければならない理由として曾国藩が挙げるのは、主に軍餉という金銭的負担である。そして曾国藩は湘勇を解散したあと、二つの軍隊と関わることになった。李鴻章の淮勇と、直隸省の緑営である。

ここで、軍の呼称にふれておきたい。本稿では基本的に「湘勇」「淮勇」という表記を用いる。「湘軍」「淮軍」という表現もあるが、ほぼ同義と考えている。『清代典章制度辞典』の説明を紹介しておくと、「湘軍」は湖南団練を基礎にしたもので、咸豊3(1853)年に曾国藩が編成を始めたものであり、同治3(1864)年に天京(南京)を攻めたとき10万を号していたが、このあと曾国藩は2万5千人を削減した。主要な将領に、左宗棠、曾国荃、劉長佑、胡林翼、劉坤一、江忠源らがいた。「淮軍」は同治元(1862)年に李鴻章が曾国藩の支持を受けて、淮南地主の団練5営を基礎に、湘軍数営の助けを得て、湘軍営制に基づいて軍としたものであり、その当初は7千人であった。太平軍との戦争のなかで拡大し、同治4年にはすでに7万人あまりに達していた。捻軍鎮圧の主力となり、清朝で最強の実力をもつ武装集団となった。主要な将領に、張樹声、劉銘伝、潘鼎新、周盛波、劉秉璋、呉長慶、丁

汝昌、葉志超、聶士成らがいた<sup>\*11</sup>。『清史稿辞典』は湘勇は「拡充され編制・訓練されて湘軍となった」と説明している。また同辞典によれば、「楚軍」の含む意味は複雑で、清代官書のなかの楚軍はおもに湖南各地で招募された勇丁を指しており、のちに湖北も含むようになった。咸豊10（1860）年、左宗棠が5千人を招募し、王鑫の老湘軍を基礎としたものを楚勇あるいは楚軍と呼んだのであり、歴史家のいう湘軍は楚軍を含んでいる<sup>\*12</sup>。

## 第1節 湘勇の解散

太平天国の都・天京（南京・金陵）は同治3年6月16日に曾国荃軍によって奪還された。間髪を入れずに着手されたのが湘勇の解散である。『曾国藩年譜』によれば、同治3年7月13日、曾国藩は「湘勇2万5千人の解散〔撤〕を命じた。1万を残して金陵の防衛にあて、1万5千を残して、劉連捷、朱洪章、朱南桂などに率いさせて、安徽省南北〔皖南北〕の遊撃の師とした」<sup>\*13</sup>。同治3年7月20日、曾国藩は、「金陵全軍5万人のうち半分を削減〔裁撤〕し、2万数千人を残します」<sup>\*14</sup>と上奏している。「軍費〔餉需〕は日に日に不足し、削減〔裁勇〕のほかには良法はない」<sup>\*15</sup>のだった。同治3年9月25日の書信には「どこの銀錢であろうともすべて解散〔遣營〕につかひ、まず支給する。（中略）余分な資金が少しでもあれば続けて削減〔裁撤〕する」<sup>\*16</sup>と記されている。

だが「兵勇10万、給料未払い分〔欠餉〕はすでに500万両余りを超えている」<sup>\*17</sup>のが同治3年8月の実情だった。南京で首功をあげた曾国荃の勇を解散には、給料の未払い分を全額支給しないわけにはいかなかった<sup>\*18</sup>。巨額の金を即座に用意することはできないので、約束手形が支給された。「湖南人には、湖南錢店の票を発給する。1枚約10両であり、喜んで従わないものはないはずである」<sup>\*19</sup>。曾国荃の解散した〔遣散〕勇が「長沙を通るとき、半分を支給し（遣散者に今年全額支給しては、残留者はみな残留を望まないであろう）、残りは営官が期限のある票を与える」<sup>\*20</sup>という形がとられた。もっとも期票〔期票は約束手形〕の「期限がきたとき約束を果たすことは難しい」<sup>\*21</sup>というように、期限通りに支払いができるかどうかは心許なかったようである。同治5年までに各省の湘軍は20万人あまりを削減され、残ったのは10万あまりであった<sup>\*22</sup>。同治6年2月になると、曾国藩は「臣の湘軍10万あまりのうち、劉松山の老湘營だけがまだ解散されておらず〔未撤〕、給料未払い分〔欠餉〕もまだ清算しておりません。このほかの各營はすべてすっきりしました〔一律清楚〕」<sup>\*23</sup>と上奏している。

「湘勇招募の初めのころには、郷里の農民を選びましたので、有業者が多く、無根の者は少なかったので、給料未払いを解決すれば〔欠餉有着〕、静かに帰郷し、別に問題〔枝節〕は起こしませんでした」<sup>\*24</sup>と曾国藩は上奏している。だが後になると、そうはいかなかった。同治4年、御史・朱鎮が、「江寧奪還後、解散した〔裁撤〕兵勇は、巷〔閭閻〕に分散し、民居を占拠し、商売を独占し、小民が帰郷しても生活ができなくなっています。あるい

は大勢が集まって、深夜、盗みを働いています。人煙稀な地では白昼横行すらしています。解散〔遣撤〕帰郷させねば実に民間の大患であります。大吏は、兵勇の力を借りて功を成したので、しばし大目に見ざるを得ません」などと述べ、「両江総督に命を下して」\*<sup>25</sup> 善処させてくださいと上奏している。「両江総督」は曾国藩であり、文中の「大吏」も曾国藩を指すだろう。

湘勇の処遇については、様々な案が出されていた。たとえば緑営の兵にするという案があった。曾国藩はこれに反対であった。

勇丁の口糧は、騎馬兵の2倍、守備兵の3倍です。騎馬兵〔馬糧〕の缺は少なく、守備兵〔守糧〕の月1両では断じて衣食を満たすに足りません。〔故郷から〕数千里離れた場所で、衣食にも足りない缺に任用されることに同意する者がおりましたか。湖南の質朴〔樸実〕の勇を江南〔三江〕の緑営の兵にしようとしても、〔彼らは〕決して望みません。それを願う者は、遊び怠けて帰るところのない〔無帰〕者です。(中略) 勇は帰郷させ、兵には土着の者を募集するべきだと思います\*<sup>26</sup>。

屯田をさせるという案もあった。同治10年、御史・黄錫彤が、江蘇・安徽などの省には荒田が多いので、古の屯田の法にならって屯営を設け、湘軍・淮軍の解散した勇〔散勇〕を選び招いて、長江沿いの一帯を開墾し、長江の防衛を固め、租税を復活させる〔復正供〕ことを提案したが、曾国藩は「農業に従事するのは四民のなかでもっとも苦しいことです。農夫の1年の収穫は、勇丁の1ヶ月の食糧〔糧〕にも及びません」、〔無理強いするのは望むところではなく、土民と土地〔有着之業〕を争わねばならず、成果があがらず訴訟が頻発します〔獄訟繁興〕が、どうして至るところに広く委員を置いて、屯丁と郷民の争いをおさめることができましょうか〕\*<sup>27</sup> と反対している\*<sup>28</sup>。

## 第2節 哥老会

本節では、軍営における哥老会と、湖南省の哥老会について述べる。哥老会とはどのような組織なのか。邵雍氏の『中国近代会党史』によると、

哥老会は道光年間に四川で生まれ、太平天国以後次第に全国に蔓延した。(中略) 哥老会の淵源についていえば、四川地方の囑嚕(かくろ)と近親関係がある。(中略) 哥老会は太平天国を鎮圧する湘軍のなかで興起し、湘軍の転戦と解散〔裁撤〕につれて、各地に伝播した。(中略) 哥老会は梁山をまねて「山」で命名した。たとえば太行山、終南山、九龍山、武当山などであった。山の下には「堂」が設けられた。たとえば忠義堂、洪順堂、礼徳堂、仁文堂などである\*<sup>29</sup>。

湖南地区の哥老会の起源が湘軍にあるわけではなく、「少なくとも太平天国初期の湖南にはすでに哥老会の活動があり」、「早くも咸豊から同治になる頃には、湘軍のなかに哥老会の活動がみられた」<sup>\*30</sup>と邵雍氏は述べる。田玄・皮明勇氏によれば、「1861〔咸豊11〕年前後になると、ある人の計算では、湘軍の勇丁で哥老会に入っていたものは3、4割に達していた」<sup>\*31</sup>。

まず軍営で哥老会が活動した例として、湘勇きっての驍将である鮑超<sup>\*32</sup>の「霆軍」を取り上げたい。鮑超は母の葬儀のため、同治3年10月に6カ月の休暇を許されて帰郷し、その部隊は2つの軍に分けられた。一軍は総兵・宋国永が率いて四川省に向かったが、湖北省金口<sup>\*33</sup>で乱を起こした。もう一軍は総兵・娄雲慶が率いて福建省に向かったが、福建省上杭県で騒ぎを起こし、給料を要求〔索餉〕するために江西に向かった<sup>\*34</sup>。曾国藩は、「霆軍8千人が湖北金口で登岸し、命令をきかない。兵器・小銃〔洋槍〕をもって列をなして南に向かっている。叛逆なのか、単に敗れて散り散りになった〔潰散〕のか、わからない。影響がきわめて大きく、深く焦慮している」<sup>\*35</sup>と記している。同治4年5月には、「金口叛卒」も「上杭飢軍」もそれほど心配ないようだ<sup>\*36</sup>と書いており、曾国藩は一安心したようである。霆軍の給料未払い〔欠餉〕は120万あまりにもなっており、「この軍は苦労を重ねる〔積勞〕こと最も長く、功は最も多く、平素から規律に乏しく、将卒は連勝に驕り、給料〔餉〕がないことを怨み、統将〔鮑超〕が四川に帰っていたときにまた新疆遠征の苦がありました。それで四川に向かった8000人については、臣は早くから散り散りになること〔潰散〕をおそれておりました」が「謀叛を起こして賊〔寇〕になるとは思いませんでした」<sup>\*37</sup>と曾国藩は上奏している。

霆軍で叛乱を扇動したのが哥老会であった。回民蜂起鎮圧のために西北に向かっていた「宋国永が臨時で率いていた霆軍の一部が、武昌上流60里の金口で前進を止め、哥老会の首領で、参将・欧陽暉、遊撃・羅三元らの指導のもと、血をすすって結盟し、軍官がピンハネした未払い分の給料〔欠餉〕を催促した」<sup>\*38</sup>のである。湘軍で哥老会が興起した主要原因は各レベルの軍官が月餉をピンハネしたことで、「切実な利益を守るために、湘軍の一部の士兵は哥老会という組織を利用して反抗闘争をしたのだ」<sup>\*39</sup>と邵雍氏は述べる。

曾国藩によれば、「哥老会匪・蕭朝挙は、霆営の新たに解散された〔撤〕勇を脅して無理に入会させ、さもなくば強奪してすっからかんにするという。陸家嘴地方で事を起こそうとしたところ、炮船が団勇と会合し、水陸挟み撃ちにして数百を殲滅した。また湖北省から派兵してしらみつぶしに捜査・逮捕し、余匪が四散していたのを、長江沿いに一律に肅清した。頭目の蕭朝挙もまた麻城地方〔湖北省黄州府麻城県〕で団勇が取り囲んで捕らえようとしたとき、その下の脅されていた者が起ってこれを殺した」<sup>\*40</sup>。哥老会匪の頭目の一人である「韓大頤もすでに捕らえて処刑した」<sup>\*41</sup>。だが、その影響は甚大で、「皖南〔安徽省南部〕の各営はみな口実を設けて餉を要求して蠢動している。その禍は霆営に始まった。風気がひとたび開かれると、諸軍は次々にまねをした」<sup>\*42</sup>のである。

同治4年11月の曾国藩の上奏によると、

近年、江湖には哥老会なるものがあり、仲間は非常に多いです。〔安徽省〕徽州府・〔徽州府〕休寧〔県〕で給料を求めて騒ぎを起こした〔嘩餉〕勇の多くは入会している匪であります。あるいは噂を聞いてひそかに逃れるか、あるいはあらかじめ軍営を離れましたので、有能な人員を派遣して追わせ捕らえています。〔浙江省嚴州府〕淳安〔県〕では李昌度を、〔江西省〕饒州〔府〕では曾紹廬・楊得勝を、また楊村では金国琛が沈学鵬・周懷林・李良和を捕らえました。すべて処刑しました。合計で、重要犯人12人を捕らえて斬りました。このほか、嘉禾〔不詳〕の曾榮慶、〔湖南省長沙府〕益陽〔県〕の蔡允徳、〔湖南省澧州直隸州〕安福〔県〕の朱大順、〔湖南省長沙府〕湘郷〔県〕の趙永和はまだ捕らえておらず、現在捜索中であり、事を起こした勇丁は尽く斬ります。(中略)湘勇はもともと規律を重んじています。このたび法を畏れなかったのは、哥老会が内部から扇動したからです。都司の龍家寿という者は哥老会の巨魁です。銭を刻んで朱を塗って符牒〔符信〕とし、衆を集め金を集めることを放票と称しています。給料を求める騒ぎ〔閩餉〕のさい、龍家寿は令箭〔軍中で発令のしるしとして用いた竿頭に鉄製のやじり状の物をつけた小旗〕・令旗〔軍令用の小旗〕を私造し、銅鑼を鳴らして命令を伝え、告示〔条示〕をおおいに張り出し、その党は命を謹んで奉じています<sup>\*43</sup>。

曾国藩は次のように述べている。「各軍がみなこのように騒ぎを起こして〔嘩閩〕全額〔全餉〕を得て、解散〔遣散〕されて得意で去れば、いたるところ給料要求の騒ぎ〔閩餉〕となる。そうしたら、どうやって弾圧するのか。給料不払い〔欠餉〕はもちろんすべて支給するが、事件の首唱者を軍営ごとに2人ずつ引き渡してはじめて給料を渡して解散〔発餉遣散〕してよいというのが小生の考えである」<sup>\*44</sup>。

さて、このような大事件を起こした霆軍であったが、曾国藩はすぐには解散しなかった。第一に、全部解散すればおそらく異変が起こる、第二に、霆軍は戦場では、「実に群賊の憚るところであり、楚勇・湘勇・淮勇の及ぶところではないので、この奥の手〔法門〕を残し、急場に備えたい」<sup>\*45</sup>のであった。だが直隸総督に就任するにさいして、やはり解散することにした<sup>\*46</sup>。自分が北に行き、遠く離れるにあたり、「事を起こすので有名」な霆軍をこのままにして、「後任に累を残すことはできない」<sup>\*47</sup>からであった。同治7年閏4月に霆営を削減〔撤遣〕したときは、「黄梅〔湖北省黃州府黃梅県〕で「游勇・哥匪が3000-4000人集まって、霆営の不逞の徒に乗じて、明に脅し暗に結託し、あやうく叛乱になるところであった。(中略)現在、霆軍は10分の7を解散し、残っているのは8営のみ、もはや心配ないであろう。(中略)金口の謀叛以来、私は霆営のことを憂えない日はなかった」<sup>\*48</sup>。それでもなお用心して、湖南まで送り届けることにした。「金口などの地まで連れて行って、うまく解散〔遣撤〕するよう命じた。(中略)金口は湖南〔湘〕から比較的近く、勇丁が帰郷

する道程は比較的短い。(中略)たくさん船を雇い、金口から湖南などの地まで送ってくれ。(中略)解散〔撤〕するはしから送れば、平穩無事、心配ないであろう」\*49

次に、湖南省の哥老会について述べたい。曾国藩の淳朴だった故郷は、湘勇の帰還によって大きく変貌してしまった。曾国藩は深く憂慮していた。故郷には「解散した勇〔散勇〕で帰郷した者が多い。退屈でことを起こすのを恐れている。〔心配なのは〕哥老会のことだけではない。米穀、酒、肉、すべてが値上がりして、徐州や濟寧などの数倍であり、人々の暮らしが難しいのも心配である」\*50、「我郷の習俗は日に日に奢侈となり、物価は騰貴している。提督・総兵・副将・参将〔提、鎮、副、参〕に保拳された者は、閑散な暮らしに飽き足らず〔不甘家食〕、雄飛の思い〔鷹隼思秋之意〕が躍如としている。哥老会は人数が非常に多く、表面にあらわれない災禍は深い」\*51、「湖南では近年、一品、二品に保拳された者が非常に多く、財物を携えて帰郷した者もまた少なくない。習俗は奢侈となり、思いのままに金を使いながら、自分では生計の道がないと思っている」\*52、「我が郷は近頃風俗が奢侈淫靡となり、昔は勤勉で素朴だったのが一変してしまった。これは実に、同郷人が長いこと従軍し、職官が非常に多いためである。もとはといえば、小生の罪である」\*53。

哥老会について、同治6年7月に曾国藩は、「現在会匪は多いが、湖北・湖南・四川の3省が最も多く、3省のなかでは湖南が最も多い。湖南では、長沙府が最も多く、衡〔州府〕・永〔州府〕がこれに次ぎ、その他はたいしたことはない。長沙府では、〔湘〕郷・〔湘〕潭・長〔沙〕・善〔化〕・〔湘〕陰・寧〔郷〕県が最も多く、益〔陽〕・瀏〔陽〕県がこれにつぐ。その他の県はたいしたことはない。天下広しといえども、大変なのは数ヶ所にすぎない」\*54と述べている。

邵雍氏によれば、

太平天国の失敗後、軍営の哥老会は湘軍の大量の削減〔裁撤〕にともなって、湖南で盛んに発展し始めた。解散〔裁撤〕された湘軍が会をつくって事を起こす根本原因は、生計に迫られて捨て鉢になったことである。「解散された〔遣散〕勇は長い間軍隊におり、郷里に帰ったばかりで、その気が静まらない」というのは事実であるが、さらに重要なのは「帰農するというのが、実際には耕す田がない」ので、ひとたび呼びかけがあれば、しばしば風に靡くのであった。次に、「散勇で回籍した者が多く」、湖南では「米穀、酒、肉、すべてが値上がりして、徐州や濟寧などの数倍であり、人々の暮らしが難しい」のであり、さらに湖南は連年水害と旱害にあい、多くの人民、とくに解散された勇〔散勇〕の生計に非常に大きな影響を与えた。1867年夏〔1867年は同治6年〕、哥老会は曾国藩の故郷、湘軍の発生地である湘郷で事件を起こした。首領・曾広八はもとは逃亡した湘勇であった。(中略)1870年5月〔およそ同治9年6月〕、瀏陽哥老会の首領で長年の弁勇である邱子儒、張紫亭らが衆を集めて事件を起こした。(中略)同年秋、湘潭南郷の朱亭地方の哥老会もまた衆を集めて事件を起こした。(中略)湘郷哥老会は、



朱亭の変が起きたのをきいて、これも衆を集めて事件を起こした<sup>\*55</sup>。

湖南省あるいは湘郷県の哥老会についての曾国藩の記述は多い<sup>\*56</sup>。曾国藩は同治11年2月に亡くなるが、その前年、同治10年4月<sup>\*57</sup>にも大事件が起きている。哥老会によって、「益陽、龍陽〔湖南省常德府龍陽県〕、沅江〔湖南省常德府沅江県〕が相次いで陥落した。この輩は各省に蔓延し、遊蕩無業、つねに戦乱を追い求めて跋扈〔得逞〕している。一旦有事となれば、急速に仲間を糾合する。すぐに撲滅できるかわからない。非常に焦慮している」<sup>\*58</sup>、「近頃、匪党千人あまりが益陽の衙署を急襲して火を放ち、その後、沅江、龍陽を襲った。韞帥〔劉崑<sup>\*59</sup>〕が軍〔營〕を派遣して搜剿したが、すぐに滅ぼせるかどうかかわからず、非常に焦慮する」<sup>\*60</sup>。

哥老会匪について曾国藩は次のように言う。「湖南の人間〔湘人〕で大官となって帰郷した者には、困窮して志を得ない者は多いが、あえて戎首となり乱を提唱する者がいるとは聞いたことがない」<sup>\*61</sup>、「湖南省の解散された〔遣撤〕勇は10万をくだらないが、軍〔營〕で蓄えのできたものは10のうち2、3もない。家に帰っても仕事はできず、みな似たようなもので、集まって非を成すのも意中のことである。しかし、營官・哨官など階級がやや高い者には得意な者が多く、叛逆を思い主唱者となる者は結局のところ、どれほどもない」<sup>\*62</sup>と曾国藩は述べている。

哥老会の背後には曾国荃がいるという噂も囁かれていた。「都の士大夫の多くは、湖南哥老会は沅弟の昔の部下〔旧部〕であり、沅弟が庇護していると言っているという。非常に奇異に感じる。沅弟が帰郷してすでに4年、門を閉ざして自重し〔自飭〕、公事に関与していないのに、このようなデマに汚されるとは！」<sup>\*63</sup>。もう一人の弟・曾国潢は、哥老会員をしらみつぶしに捕らえようとしていた。曾国藩はそれに反対で、曾国潢に次のように書き送っている。

実缺の提督・総兵〔提鎮〕で最も信頼できる腹心である蕭孚泗、朱南桂、唐義訓、熊登武らについては、もし追求〔搜求〕しようとするれば、その家は完全に武装解除してないかも知れず、他人から哥老会主だと誣告されないと限らない。私が思うに、一品、二品、三品に保挙された武職はすべて礼儀をもって遇し、誠意をもって感激させるのがよい。もし罪を犯して連行されるようなことがあれば、弟は家であつねに間にたつてなだめ、守ってやって〔保全〕ほしい。哥老会だとはっきりしていたら、密室に呼び、懇切に説得〔勸諭〕し、自首〔首悔〕させ、一死を免じてやる。柔だけが剛〔剛愎〕の気を制することができる。誠だけが頑迷な民を教化することができる。我が家では兄と沅弟は兵を率いて、どちらも殺人を業とし、自強を本としている。弟は家において、人を生かすことを心とし、柔弱を用とすれば、相反して相成るのである<sup>\*64</sup>。

曾国藩の見るところ、哥老会の一件は、告示を出し、有罪か無罪かのみを問い、会員か否かは問わず、連座させたり濡れ衣を着せたりするのを厳禁して、民気を安んじるのが良いのだが、曾国潢は「それではだめだとして、根株を探し出そうとする。〔曾国藩が〕ひそかに恐れるのは、探せば探すだけ多くなり、探せば探すだけ乱れ、禍は終わる日がないということ」\*65であった。

兵を興して捜査するのでないとすると、「郷団」や「族団」を作って哥老会の頭目を探して県に送ることになる。だが曾国藩は「団」にも反対で、当時湖広総督をつとめていた李瀚章に次のように頼んでいる。

「団」は利害が半々、利が少なく害が多いかもしれない。団をつくれれば必ず局をつくることになる。局をつくれれば必ず費用を集めることになる。戸ごとに寄付を募る、あるいは土地の多寡によって割り当てるのだ。年々金を集め、夜ごと巡邏する。貧家はそれ〔擾〕にたえられない。局で集金する人もまた公平・廉潔でみながこれに服するとはかぎらない。匪が局に連れてこられれば、釈放が主となる。本人が反省文〔悔結〕を書き、親類や近所の者〔族隣〕が保証書〔保結〕を書けば、釈放して良民とする。もしだれも保証する者がいなければ県城に送られる。県官は取り調べ〔審明〕のあと巡撫〔撫轅〕のところへ護送し、許可が出たら殺すことになる。聞くところでは、団・局のなかには勝手に殺す者がいて、人々〔衆情〕はこれに不満で、匪首は狡猾に思いを遅くする〔狡焉思逞〕。哥匪は多いが、誣告される者もつねにいる。あるいは怨みのある家に誣告される、あるいは匪党に濡れ衣を着せられる。これらはすべて団・局の役員〔董事〕が曲げて大目に見るのであり、無実だと訴える者を信じ、告発した者を信じなければ〔守信訴誣者為真、不信告者、扳者为真〕、匪どもは簡単に逃れ、簡単に散ってしまう〔解散〕。さもなければ、ひとたび誣告されれば、団・局は必ずや重罪とするので、互いに徒党を組み報復しようとして、殺意は止むことがない。軍興以来、州県の断罪ではしばしば裁判に訴えた者に罰金を課しており、非常に民を苦しめている。団民は会匪で釈放する者にも、罰として金を出させて団費とする、あるいは自分の懐を肥やしていると聞く。これが大いに人心に逆らい、匪首がそれを口実に乱を煽るのである。閣下はもとより郷民の心を得ている。告示を出して次の三つを禁止してもらえないか。一、団・局が勝手に殺すことを禁ずる、また拷問を許さない、二、団・局が誣告・誣扳〔濡れ衣を着せる〕の言葉を轻信〔輕聽〕することを禁ずる、三、団局が罰金を課すのを禁ずる、また多額の局費を集めるのを禁ずる。人はみな哥匪には厳しくすべきだと言い、弛めるべきだと言うのは小生一人だが、兵を出して征討するときにはじめて厳しくしても遅くはない\*66。

曾国藩の哥老会への対処法は、湖南巡撫・劉崑への以下の手紙に集約されている。

だいたい入会するときは、二つの話〔議論〕がもっとも魅力的なのである。一つは、軍隊〔營〕では集まっていれば〔会聚〕、戦争のとき互いに救援し、何かのときは〔有事〕人に欺かれずに済む。一つは軍隊〔營〕を出て離散したあと、貧困のとき会員〔同会〕に遇えば衣食にありつくことができ、一人旅のとき会員に遇えば強奪を免れることができる。このため心を合わせて入会するのである。悪人はもとより多いが、善人もまた非常に多い。そのうちで哥老会に入って力を得て〔充老冒雄長〕財を集めることを願うのは、数百人のうち2、3人に過ぎない。謀反叛逆を願う者は数千人に1、2人にすぎない。もしこの1、2人を捕らえるために数万人に累が及べば取捨がつかなくなり、心にも忍びがたいものがある。愚見では、次のようにすべきである。広く告示を張り出し、罪の有無だけを問い、会員か否かは問わない。罪というのは、大罪は1条、謀反叛逆である。中罪は3条、1に殺人傷害、2に大勢を集めて略奪すること、3に兵器の造蓄である。これを治める法は、大罪の叛逆であれば兵を興して討伐〔誅剿〕し、党与をつきとめて、妻子も連座させる。中罪三条は事件ごとに判断し、重い者は死刑、軽いものは枷杖とする。入会しておらず、この3条を冒した者も軽々しく放免〔輕縱〕しない。入会してこの3条を冒した者も加重はせず、党与をつきとめず、妻子は連座させない。法廷で尋問するときは、その事件の供述を認める〔認供〕か否かだけを問い、平素入会しているかどうかは問わない。中罪3条のほか小罪を犯していても、会員か否かは問わない。このようにすれば会の千人、万人の善人は安心して無事でいられるし、会のなかの数千の悪人は孤立して衆を惑わすことはできない<sup>\*67</sup>。

### 第3節 淮勇

同治4年4月、捻軍との戦いのなかで蒙古科爾沁親王・僧格林沁が戦死した。欽差大臣として捻軍を征討するよう命を受けた曾国藩は5月に南京を離れた。捻軍との戦いについては、梁啓超が以下のように簡潔にまとめている。僧格林沁は

勇敢さはありあまるほどあったが、知識が乏しく軍を治める方法も知らないので、軍令はあまり行き渡らず、至るところで部下は婦女の暴行や略奪などをしていた。その残虐さは髮軍〔太平軍、引用者〕・捻軍と違わないために湖北の人民は大いに失望した。そのとき金陵を取りもどしたばかりで、数万人の太平天国の残党が捻軍に合流していた。それらがまた河南・山東に侵入して都市を略奪した。同治四年の春に、僧王は銳意輕騎兵を率いて敵將を追いかけ、一昼夜に三百里も走って曹州に至った。部下の多くは恨んで叛乱し、四月二十五日について捻軍の大將の計りごとにかかって敗れ、力戦の末、落馬して死んだ。朝廷は驚いて悲しみ悼み、たちまちに曾国藩を欽差大臣に起用して、河北・山東・河南の軍務を督率させ、李鴻章に両江総督の職務を代行させ、曾国藩のため

に兵糧の運輸を後援するように命じた。最初、官軍による捻軍の掃討は、ただ一味を追いかけるだけで、労して功はなかった。しばらくして進路を防ぐ戦法を取ったが、それは一時的な彌縫策だけであった。要するに、攻めるにせよ守るにせよ、中途半端で目前の安らぎを求めて敵の鋭気を養わせるか、さもなければ無謀でせっかちに進んで自分の兵力を鈍化させていくかであり、一度も計画して、一定の方策を立てたことはなかった。そのために軍隊を遣わして十五年経っても何一つ成果はなかったのだ。曾国藩がこの任務を受けてから、初めて「長い包圍陣で囲んで征服する」という計画を立てた。彼は「必ず敵をかたすみに追い込んでから、一挙に殲滅するのだ」と言明した。その指図を李鴻章が受け継いだので、ついに中原を定めたのである<sup>\*68</sup>。

曾国藩が統率していたのは湘勇 8000 人と淮勇 60000 人の合計 68000 人、湘勇の比率は 11% にすぎなかった<sup>\*69</sup>。太平軍との戦いのなかで、淮勇は急速な発展を遂げていた。江蘇省平定の 3 年余りで、淮軍は 13 営 1 万人から 130 営 7 万人近くにまで発展したのであり、淮軍の 3 年は湘軍の 15 年と較べて「勝るとも劣らなかった」と王盾氏は言う<sup>\*70</sup>。淮勇 7 万は「江南財賦重地、江海関と江漢関という 2 つの関、長江中流・下流の釐金、兩淮塩稅・湖広塩引の巨大な財力を給料の財源〔餉源〕とし、さらに上海江南機器製造總局と金陵製造局という兵器の製造・整備〔修配〕および火薬供給の二大基地を擁していた」<sup>\*71</sup>。

先にあげた梁啓超の描写からもわかるように、故・僧格林沁の捻軍猛追はすさまじいものであった。

兵を率いて賊を追うこと、日に 70-80 里、あるいは 100 里あまり進んだということですが。しかし、歩隊は馬隊に及ばず、驚馬は良馬に及ばず、いきおい足なみはそろいませんでした。僧格林沁は 3 月に汶上〔山東省袁州府の県〕に着きましたが、歩隊は遅れること 7 日でようやく袁州に着き、馬隊のなかにも 3 日遅れて着いたものがあつたと聞いています。行軍があまりに速ければ、米穀を携帯して鍋を埋めて飯を造ることができませんので、州県に通知して麦粉食品や飯〔面飯〕を出させるしかありません。戦災困苦の後、州県は数千人の食を用意するのは難しいのです。またあるいは慌ただしく知らせを聞いて家丁は逃げて行方をくらまし、あるいは 2 つの県の境で互いに責任をなすりつけ、将士はおくれまいと先を争い、飢飽が同じでなく、連日一食も得られない者もいます。その隊伍が整い難いのはこのためであり、その行軍が神速なのもこのためなのです。臣のところの行軍の例では、毎日行軍し、テントをはり〔支帳〕、鍋を埋めて飯をつくり、州県に米の提供を求めません。古法にならい、一日 40 里しか行軍せず、少なければ 20、30 里です。李鴻章の淮勇も、湘勇〔楚師〕の法にならっています。その歩歩穩妥はこのためであり、その行軍遲鈍もこのためです。僧格林沁はこの賊を討つのに、1 年来、湖北、安徽、河南、江蘇、山東の 5 省を周歴していますが、他の者が引き

継いでこの賊に対処するなら、絶対に5省は無理です<sup>\*72</sup>。

捻軍の移動は非常に速かった。「捻匪がこのたび北に向かったさいには、一昼夜で160里進んだという。河も2つ越えている」<sup>\*73</sup>。「捻匪の粵匪〔太平軍〕と異なるところは第一に進むのが速く、毎日100里あまり進めるところ」であり、「湘軍の旧例でいえば、3日でやっとな追いつける」<sup>\*74</sup>。僧格林沁は「追賊のさいにはいつも、粗末な〔粗糲〕昼食、夜は簡単なテント〔単棚〕で眠っておられました。(中略)臣は10分の1、2に及ばないことを愧じております」<sup>\*75</sup>と謙遜しながらも、「古より行軍は糧運を先務とする」<sup>\*76</sup>と曾國藩は言う。劉銘伝ら「淮勇の強みは火器〔鉄砲など火薬を使う兵器の俗称〕にあり」<sup>\*77</sup>、淮勇は「兵器・輜重が多く重く、従来行軍の遅さは湘軍より甚だしい」のだった<sup>\*78</sup>。もっともやがて淮勇の行軍速度は上がり、銘・鼎両軍は「毎日80-90里進むことができ、弊部の従来の遅鈍の習を一変し、しだいに僧邸〔僧格林沁〕の昔の猛追の風がでてきた」<sup>\*79</sup>。

主食も重要であった。南方の人間は米を、北方の人間は小麦や雑穀を主食としていた<sup>\*80</sup>。「飲食が本性に違えば、駆使しようとしても役に立たない〔不得力〕」<sup>\*81</sup>と曾國藩は確信していた。「淮勇は湘勇よりは麦粉〔面〕を食べられるが、それでも一飯一面である。もし陝西・山西などの省で一年中麦粉を食べるとしたら、劉〔銘伝〕、周〔盛波〕らも絶対に合わない」<sup>\*82</sup>。北方人から成る「淮北勇」の場合は食習慣が違った。「張敬堂太史〔張錫嶸。翰林院編修〕は堅忍耐苦、募った勇はもっぱら淮北の麦粉雑穀を食べられる人である。淮水以南の面食に慣れていないものは、募らない」<sup>\*83</sup>、「淮北の人はもっぱら麦粉〔麦面〕を啖い、北方の風土と合う」<sup>\*84</sup>のであった。

曾國藩はしばしば湘勇を「強弩之末」(『漢書』韓安国伝に見られる言葉)と表現している。「強い弓で射た矢も、最後にはその勢いが衰えて、魯で産する薄絹さえも射通すことができない」ことから転じて、「強いものも、衰えてしまっただけは何事もできなくなること」である。一方、淮勇は「発劔之際」(研ぎ立ての刃)であった<sup>\*85</sup>。「湘勇の鋭気は次第に消え、淮勇に頼ってその窮状を切り抜ける。小生は淮勇をつくった当初からこれを見越していた」<sup>\*86</sup>。湘勇は「萎縮して北征したくないものが10人のうち9人だという。無理に派遣しても、しよせんは強弩の末、役に立つのは難しい」<sup>\*87</sup>のに対して、「淮勇の気はまさに強盛で、絶対に解散〔裁〕してはならない。湘勇は多く早く解散〔裁〕するのがよい」<sup>\*88</sup>のであった。上奏文でも捻軍征討には、「もっぱら淮勇の力をかりるしかありません」<sup>\*89</sup>と述べている。

曾國藩はかつて湘勇の諸将たちに、まるで教師のように接していた。彼自身の言葉によると、

臣は騎馬が不得手で、敵を前に自ら指揮をとることはできません。また行軍は遅く、10年あまり、硬寨をつくって鈍い戦争をする〔打呆仗〕のみで、奇謀や方略で意表をつい

て敵を制したことは一度もありません。これは臣の短所です。昔、諸将が会いに来ると、すぐに接見しないことはなく、諄諄と教え導き、上に忠勤をもって報国することを勧め、下に騒擾を戒めて民を守らせました。別れてからは手紙を送って戒め、師弟督課のさまがありました。その他、銀・米・銃弾〔子〕・火薬〔薬〕運搬の遠近も必ず時日を計算して、適切に計画し、虚言で騙したことはありません。将士は臣の苦衷を理解し、家族父子の情がありました。これが臣の昔日のやや長じた点でした<sup>\*90</sup>。

淮軍の「将領はみな李少荃が選練したもの」<sup>\*91</sup>であったが、曾国藩は、上のような湘勇のやり方で淮勇諸將に接しようとした。「淮勇はまだ暮気〔活気のない様子〕がないが、近頃、諄諄と諭し〔勸諭〕、騒擾を戒め、令名をまもろうとしている」<sup>\*92</sup>、「口を極めて戒めて〔苦口告誡〕、満ち足りて〔盈満〕暮気を生じることを防がなければならない」<sup>\*93</sup>と淮勇の教育に力を入れている。曾国荃に対しては、淮軍について、「私の言うことを聞くという点では、少荃〔少泉〕の言うことを聞くのと変わらない」<sup>\*94</sup>と述べているが、実際は難しい事情があったようである<sup>\*95</sup>。同治5年5月には、李鴻章の長兄・李瀚章に次のように書き送っている。

淮勇の統領たち、省三〔劉銘伝〕、琴軒〔潘鼎新〕、幼泉〔李昭慶。李鴻章の六弟〕、仲良〔劉秉璋〕らはみな遠大な志をもち、抜きん出て功績をあげることを思い、行軍にも規律を重んじ、騒擾を少しも許さない。近頃、周海舫〔周盛波〕だけが名望を損なったので、昨日指示〔批〕を書いて譴責した。その写しをご覧に入れる。楊少銘〔楊鼎勳〕は近頃遊撃に出始めたが、軍律はどうか？閣下がもし諸將と連絡をとっていれば、愛民すなわち幸福、擾民すなわち災い〔造〕の道だと諄諄と訓戒してもらいたい。僕は統領たちに対しては、その令名を守ることを第一義としている。銀錢などのことを掣肘しないことはその次、功名を願ひ出ること〔保獎功名〕はまたその次である。再三叱責し、あたかも師の教えのようである。あまりにうるさくて聴く者は嫌になると思うが、しょっちゅう言わないと士卒は忘れてしまう。閣下に、ついでのとときに私にかわって訓戒してもらえば、さらに気をつけるようになると思う<sup>\*96</sup>。

曾国藩は相当きびしく淮勇を教育していたようである。淮勇の統領たちが、諄諄と訓戒されて当惑している様が目に浮かぶようである。彼らは、なんとかしてくれと李鴻章に泣きついたのではないだろうか。「規律を重んじ、騒擾を禁止する、これが耐煩〔辛抱〕中の第一義であり、淮軍・湘軍の看板〔老招牌〕である」<sup>\*97</sup>と、曾国藩は李鴻章に言う。また、「淮軍の隊伍の整然たること、武器の精鋭なることは各部隊の遠く及ぶところではない。ただ傲慢で敵を軽んじる心をふくむこと堅く、聖人ことに臨みて謀を好むという教訓をあまり意にとめない。これを抑えようとして、その気を挫くことを恐れる。閣下がよく訓戒して、諸將

がみな慎重で謀を好み [沈慎好謀]、気は減じないようにすると良い]\*<sup>98</sup>。

同治 5 年 7 月、劉銘伝に休暇をやりたいたいと言ってきた李鴻章に、曾國藩は次のように文句を言っている。相当頭にきているようである。

省三を家に帰して休息させたいとのことだが、絶対に不可である。現在大きな精銳部隊 [勁旅] がいないことに苦しんでいるところである。霆軍と省軍の二軍だけがまだ頼りになる。(中略) 目下、淮勇各軍はすでにこちらが統轄しているのであるから、閣下には一切構わないでもらいたい。およそこちらにこっそり頼みにいくものは、すべてこちらで審査決定し、号令を一にして駆使すべきである。今後、淮軍については、營 [營頭] の削減 [遣散] は必ずまず左右に相談するが、そのほか、進む止まる、分ける合する、保挙する弾劾する、追加募集 [添募]、休息休暇、すべてこちらで直接決める。もし妥当でないことがあれば、親展状 [密函] で知らせてくれ。自問しても、年取って気弱になり、寛大に過ぎることはあっても厳格に過ぎることは絶対にない。つねに父や師の愛情で、あるいは叱責し、あるいは激励する。すべては子弟が令名を成し、立派な人になることを望んでのことである。(中略) 以前、湘軍では、たとえば羅羅山 [羅沢南]、王璞山 [王鏊]<sup>\*99</sup>、李希庵 [李統宜]、楊厚庵 [楊岳斌] らはいずれも自ら門戸を立てることを思い、人の傘下に入りたがらず、小生、胡 [胡林翼]、駱 [駱秉璋] らの足下にいたがらなかった。淮軍では、劉 [劉銘伝]、潘 [潘鼎新] らは、気は盛んであるが、自ら天地を開こうという [自辟乾坤] 志がなく、多くは貴下の足下にいる。閣下がうまく制御し、出藍 [出藍勝藍] の者を出さないのか、あるいは諸侯にもともと遠大な志がなく、激励しても奮起しないのか。淮勇は成立以来、だいたい順境にあり、大きな失敗を経ておらず、節義 [奇節] に殉じてもない。困難がなければ奮い立たず [不能激] せず、譏られねば発憤 [自憤] しない。閣下がこれを発憤させ、奮い立たせ、ねぎらい、教え、統將たちに苦勞させて、立派にして [成就] ほしい。そうすれば、小生はこれを藉りて、捻 [捻氣] を平定し、責め [咎責] を免れ、大きな恩恵を受けることになる<sup>\*100</sup>。

同治 4 年 5 月、捻軍征討を命じられた時点からすでに曾國藩は「淮勇は精銳 [勁旅] とはいえ、互いに馴染みがなく [上下素不相習]、思うように指揮できるかわからない」<sup>\*101</sup> と懸念していたが、同治 6 年 5 月になると、「他營の兵勇は、自分の管轄する兵勇ほど頼りにはならないことがよくわかった」<sup>\*102</sup> と述べるに至る。同治 6 年ともなると、淮勇も当初の氣力を失ってきた。「淮軍は精銳な軍隊 [勁旅] であるが、その精銳の気は、はじめて上海に向かったときに遠く及ばない。營官の多くは提督・総兵 [提鎮] であり、統領の多くは余財があり、上にはもはや研ぎ立ての刃ではなく、下にはさらに致死の心はない」<sup>\*103</sup>。「淮勇は駆け回ること数年、暮氣がある」<sup>\*104</sup>。

湘軍・淮軍の生命線は江南であった。江蘇は「弊軍の根本」\*105 であると曾国藩は言う。「江蘇は臣の軍の銀・米・武器の出所であり、湘勇〔楚勇〕・淮勇の根本」\*106 であった。江南で軍餉を工面するためには、江南の大官のポストを手放すことは絶対にできなかった。捻軍征討にあたっていたとき、軍餉はすべて李鴻章が送ってくれた。曾国藩は言う。

1年あまり捻軍を討っているが、軍餉〔餉需〕はことごとく少荃が送ってくれている。湘軍に毎月7万あまり、淮軍に毎月30万あまり、少帥は全く不足なく湘軍の軍餉〔湘餉〕を送ってくれる。淮軍の軍餉〔淮餉〕は年にわずか9関、全く分け隔てしないばかりか、湘軍を優遇してくれている。(中略) 彼〔李鴻章〕には两江総督あるいは江蘇巡撫のポスト〔実缺〕が絶対に必要である。それがあれば毎月40万の餉を工面できる。もし彼が江蘇を離れば、軍餉〔餉項〕は工面できず、淮軍・湘軍の軍心はただちにばらばらになり、大局への影響は大きい\*107。

曾国藩は两江総督に帰任するつもりはないと言っており\*108、「他の者を两江総督に任命するか、李帥〔李鴻章〕に給料を調達する大官〔籌餉大員〕を推薦してもらうか」\*109 してもらいたがっていたが、李鴻章が説き伏せて南京に帰らさせた。「少荃がきて長く坐り、灯後にやっと帰った。私に金陵に戻って長く两江総督をつとめるよう懇ろに勧める。言うことはすべて情理に合っている〔准情酌理〕」\*110 と曾国藩は日記に記している。同治6年1月、曾国藩は两江総督印を引き継いだ。今度は曾国藩が李鴻章のために軍餉を工面することになる。曾国藩が两江総督、李瀚章が江蘇巡撫、丁日昌が江蘇布政使に任命され、「朝廷の配置〔区画〕には心遣い〔苦心〕がよくわかる」と曾国藩は述べ、李瀚章が湖広総督も代理するので、「舍弟〔湖北巡撫の曾国荃〕は征討に専念できる。江蘇、湖北、安徽、河南が信賴しあい〔心志相孚〕、血脈が貫通し〔血脈貫通〕、今後軍務は好転するだろう」\*111 と述べる。また言う、「少荃が湖広総督、韞斋〔劉崑〕が湖南巡撫、筱荃〔原文では小荃と記されているが、李瀚章を指す〕が江蘇〔巡撫〕で湖広総督を代理、この措置には深い考えがある。江・楚を一気貫注させたいというにほかならず、感謝の思いが増す〔増感〕」\*112。

曾国藩は李家との誼を重視し、李鴻章の大成を励ました。「およそ淮湘兩軍、曾李兩家は一つ〔聯為一氣〕でなければならず、そうであってこそ賊匪を平らげることができ、外侮の侵略を許さない」\*113。「少荃は精力は小生の10倍、一度試練を経ると、それだけ学識を増す。朝廷の戒飭〔督責〕、言路の糾弾、みな意中のことである。僕は近頃手紙を書いて、『忍辱負重』の四字をもって耐えろと励ました。もし大風波があれば、僕が過ちを負い、決して一人でその責め〔咎〕に当たらせはしない」\*114。同治7年7月に李鴻章が協辦大学士に任命されたとき、「こちらの友〔朋好〕の多くは、李家〔李府〕の登用は曾氏の大慶だとして、次々に祝いにくる。これもまた一時の美談〔佳話〕である」\*115 と曾国藩は李鴻章に書き送っている。



## 第4節 緑営

曾国藩は、若い頃から緑営削減を主張していた。咸豊元年3月、北京で礼部右侍郎<sup>\*116</sup>をつとめていた時期に、次のように上奏している。

本朝緑営の兵制を考えるに、乾隆47年増兵の案が、実に兵餉過不足の一大転換でした。(中略) 乾隆の増兵は一挙に6万5000、嘉慶・道光の減兵は二度でわずか1万6千でした。(中略) 兵を5万減らし、乾隆46年以前にもどしていただきたく存じます。(中略) 八旗精鋭軍〔勁旅〕(中略)の定数〔額数〕は常に25万にすぎません。(中略) いま緑営を5万減らしてもなお漢兵は50万あまり、八旗の2倍です。(中略) ちかごろ広西で軍事が興り、続々と外兵が徴調されました。広西省の正規兵〔額兵〕2万3千、土民兵〔土兵〕1万4千、一人として役に立たないと聞いています。(中略) 6年かからずに5万減らすことができ、一馬二歩で計算すると、毎年120万の給料〔餉銀〕を節約することができます<sup>\*117</sup>。

太平軍との戦争を経て、曾国藩はますます持論に対する確信を深めた。同治3年11月には「京官だったとき、上疏して正規兵〔額兵〕5万を削減するよう願ったことがある。近年軍にいて、多年経験を積み、ますます緑営の慣わし〔習気〕があまりに深く、挽回するのは難しいと考えている。将来東南が定まったら、勇丁はすべて解散〔撤〕するが、私はなお兵削減〔裁兵〕の説を主張し、増兵の説は主張しない」<sup>\*118</sup>と述べている。同治4年12月にも、「洪〔秀全〕・楊〔秀清〕が乱を起し、捻〔軍〕・回〔民〕がつつき、軍事が興って10年あまり、ただ向荣・和春の〔江南〕大営だけが兵を用いることがやや多かったですが、ほかはみな勇丁によって成功〔集事〕しました。国家養兵の費用は一年2000万を超えます。この多事するとき、緑営が殊勲の一つも挙げたこと、良将の1人も出したことを聞きません。(中略) 陸兵を削減〔裁減〕すべきです。どうしても削減〔裁〕できないものは、食糧支給〔口糧〕を増やすべきです」<sup>\*119</sup>と上奏している。

曾国藩は、同治7年7月に直隸総督に任命するとの上諭を受け、同治8年2月に直隸総督の印を引き継いだ<sup>\*120</sup>。直隸総督に就任する直前、同治7年12月から1月にかけて曾国藩は西太后に4度(12月14・15・16日、1月17日)召見され、「練兵」に尽力するよう命じられた。1度目の召見では「直隸は非常に手薄〔空虚〕である。よく練兵するように」<sup>\*121</sup>、3度目の召見でも、「直隸は手薄であるが、重要である。よく練兵するように」<sup>\*122</sup>と念を押された。4度目の召見では、次のような対話があった。

「直隸に着いたら何を急務とする?」「お言いつけを守って、まず練兵、次に吏治を整頓

します。」「2万の兵を訓練するつもりか?」「2万人を訓練するつもりです。」「やはり兵が多いのか?勇が多いのか?」「現在なお未定ですが、おそらく勇が兵より多いでしょう。」「劉銘伝の勇は現在どこに駐屯しておるのか?」「山東境内の張秋地方です。あの軍には1万1000人あまりがおります。このほかに1万人訓練しなければなりません。あるいは直隸の六軍を増練し、あるいは別に北勇を募って訓練します。着任後に視察してから上奏し処理いたします。」「直隸地方もすっきりして〔乾淨〕はいない。匪賊が潜伏していると聞く。」「直隸と山東の境界には、もとより私塩をあつかう悪徒〔梟匪〕がおります。加えて降服した捻軍の生き残りや散在する賊〔降捻游匪〕がいたるところに潜伏しております。練兵して弾圧しなければなりません。」「外国人のことも用心〔要防〕しなければならぬ。」「天津と海港には駐兵防備しなければなりません。このほか上海、広東の各港〔口〕はいずれも非常に重要です。防衛しなければなりません。」「近頃、外省の総督・巡撫も海防のことを言っているか?」「近頃は、長毛〔太平天国〕、捻子が長年騒ぎを起こしていましたので、外国人のことは少し軽くみております。」「これは大事であるのに、放置されている。」「これは第一の大事です。いつひっくり返るかわかりません。兵は訓練しなければなりません。たとえ百年間戦争がないとしても練兵して防衛しなければなりません。」「いくつかの国が一つになったら大事である。」「もし我が国があちらと開戦すれば、数十国が一つになります。兵はきちんと訓練したとしても、決して先に戦端を開いてはなりません。講和も真剣にしなければなりません。練兵も真剣にしなければなりません。講和は一つ一つあちらと交渉〔磨〕しなければなりません。この二事は、どちらかをやめてはなりません。どちらも細心にしなければなりません。』\*123

緑営は規律が弛み、「替え玉」が横行していた。

緑営は非常に弛んでいる。兵丁の常態は次のようなものである。支給される食糧〔口分〕では自給に足りないので、いつも小商いや手職をして生活している。名目上は軍隊にいるが、実際上は町中の商店の雇われ人〔市傭〕であり、これは皆同じである。直隸は六軍の選抜・訓練をはじめから給料が増額されたが、底営の兵丁で増額されない者はますますやけになっている〔自棄〕。さらに金〔司庫〕が不足し、数年来、兵士の給料未払いが巨額にのぼり、各営の将と兵はこれを口実としている。規則・制度は壊れ、つける薬がない\*124。

給料受け取り〔領餉〕の件は、直省の緑営の風習〔風気〕によるものである。入隊者はたいてい小商いや手職を兼ねて生活している。選抜して練軍にいれると、練営と底営に分かれて駐屯するが、しばしば本人は底営の給料を受け取って、練営には行かず、練営

の給料〔練餉〕を少し分けてやって人を雇ってかわりに訓練を受けさせる。ひとたびよそに討伐に向かう〔調剿〕となれば、また人を雇ってかわりに行かせる。兵は一人だけなのに、人は数回変わるのである。座して利を得ようとして、全營〔闔營〕に服する心がない。代理の者は得るものは少なく、これまた訓練に身が入らない。そこで前回、底營の給料〔底餉〕と練營の給料〔練餉〕を一箇所で支給して確かめようとした。兵丁が底營に恋々として一身のことばかり心配し、敵に赴く志が軽いことがないようにさせて弊害を廃絶するつもりだ\*125。

曾国藩は「勇營質朴の気をもって緑營の狡猾〔油滑〕の風を少し変えよう」\*126としたが、訓練もうまくいかない。

營兵は長年の習慣がしみこんでおり、にわかには毎日演習させようとしても兵營の門を出ない。かなり苦しいようで、ひそかに逃げ出す者もいる。現在3カ月試してみたが、全く良くならない。まことに瀾上児戯の軍〔『漢書』周亜夫伝〕であり、急場の備えとして恃むのは大いに難しい\*127。

毎月1度兵營から出して〔撥營〕、200-300里行軍する。これはもっぱら、兵丁は長くふだんの砦に駐屯しており、暇でする事がないと怠惰になりやすいので、この決まりをつくり、壁を築き壕を掘る練習をさせるのだ。兵營ではテント〔帳棚〕を休息場所とし、小屋〔草棚〕を葺く必要はない。現在駐屯している以前からの兵營は、前からある小屋に少し手を入れれば良いのでそれでいいが、よそに行って新しい兵營を築くときは小屋を建ててはならない。練軍とは無事のときに臨戦の法を練習することであり、壁を築き壕を掘るのは、戦で必要なことである。小屋は戦では用いることができない。もし小屋に住み慣れれば、必ずやテントを苦とするものだ\*128。

曾国藩は「勇」の規則・制度を用いることを願い出たが、許されなかった。練營の給料〔練餉〕を毎月2万多く支給することは許可されたが、營規の変更は認められず、「緑營の怠惰・ごまかしの習慣は牢固として消えない。もし勇營の規則・制度を用いても良くなる〔日起有功〕とはかぎらない。もし従来の仕組みがすべてそのままなら、ますます自信がない。練兵のことは戦陣危険の地で試してみなければ、成果を見ることはできない」\*129。京畿防衛の頼みの綱は淮勇であった。同治8年1月、曾国藩は「目下、劉銘伝の軍1万余人が張秋に駐屯しております。この軍は現在、抜きん出て精鋭です。李鴻章に命じて、銘軍を長く京畿を守る師とすべきです。その給料〔餉項〕は従来どおり江南から出します」\*130と上奏している。同治9年4月には、「淮勇銘軍は臣の上奏した京畿防衛の師であり、大隊は張秋に駐屯しており、八營を保定に駐屯させます」\*131と述べている。「直隸が昨年平穩無事だったの

は実に銘軍が保定と張秋に分駐し、南北を鎮圧し、知らぬ間に害が消えた〔弭患無形〕<sup>\*132</sup>からだど、曾国藩は同治9年1月に李鴻章に書き送っている。

そんななか、同治9年5月23日に天津教案が起きた。6月、曾国藩は、「現在直隸には銘軍がおり、京畿を守っています。以前、李少荃揆帥と手紙で相談し、西のこと〔陝西省・甘肅省の回民蜂起〕がもし急を要するなら、8-9月にこの軍を陝西に動かすといっていました。すでに李帥に手紙を書いて、銘軍をよそに動かすのは天津の事件が片付いてからだと言いました。目下、淮軍だけが、人数が多く武器は精鋭です。万一緊急事態となれば、李帥もまた軍隊を東に動かすでしょう」<sup>\*133</sup>。7月には、「保定の銘軍2000人あまり、張秋の銘軍9000人あまりを天津、滄州などに集めます。李鴻章の部隊である郭松林、周盛伝らが、直ちに直隸にやってきます」<sup>\*134</sup>と曾国藩は上奏している。9月、直隸総督印は李鴻章に引き継がれた。11月の手紙には、「李相は8月末に天津に着いた。(中略)皖勇〔皖は安徽省。ここでは淮勇を指す〕は精鋭部隊が多く、彼〔李鴻章〕に一切を配置してもらえば、北方は〔淮勇を〕長城と恃むことができよう」<sup>\*135</sup>と記されている。

## おわりに

捻軍と戦っていたころ、曾国藩は、淮勇もいずれ湘勇と同様に解散すると考えていた。「淮勇があれば湘勇の責任が軽くなり」、翰林院編修・張錫嶸<sup>\*136</sup>が募った淮北勇の大軍を出せば「淮勇の責任が軽くなり、〔李家の〕ご兄弟にはあるいは肩を休める〔息肩〕日が来るかもしれない」<sup>\*137</sup>、「淮北が継起すれば、将来、淮勇が肩を休める〔息肩〕地となろう」<sup>\*138</sup>と曾国藩は述べている。だが、淮勇は存続した。捻軍平定のなかで、淮勇の「軍事力、経済力、政治力は、日の出の勢いであった〔如日中天、方興未艾〕。李鴻章は天京攻略、湘軍大削減〔遣撤〕のなかで、江蘇平定後に淮軍が解散〔裁撤〕されず生き残ることができるように」苦心し、「曾国藩の『防盈保泰』『力保淮軍平捻』と、西太后の『抑湘保淮』に依拠して、兵員・財源〔餉源〕を減らさないという申し分ない結果に至った」<sup>\*139</sup>のである。

王盾氏は湘勇について、次のように述べている。

湘軍の提督・巡撫・提督・総兵が天下のいたるところに存在し、防御地区は18省を越え、軍功で保擧された参将・遊撃以上は6000人を越え、そのうち提督・総兵は1500人に達したが、湖南人が清政府の中枢に入るのは、極めて稀なことであった。曾国藩は两江総督、直隸総督を歴任したが、武英殿大学士の虚銜を得ただけであった。名義上は朝政に参与した〔入賛綸扉〕が、実際には地方官〔外任〕を浮沈し、朝廷の大政には参与しなかった。(中略)湘軍軍事政治集団の軍事・政治の実力は激増したが、清政権は、湘軍が大きくなりすぎて制御できなくなることを警戒し、曾国藩兄弟が太平天国平定の使命を完成させたあと、これを疑い警戒した<sup>\*140</sup>。

一方、淮勇の場合はどうだったか。湘淮の盛衰が異なった原因について、王盾氏は「李が極力慈禧太后を籠絡したこと、曾国藩は誠実で情に篤いが宮中の援助〔内援〕がなかったこと、朝廷が湘を抑えて淮を用い、淮軍を近畿に留めて防衛〔分防〕させ、淮系の実力を北洋に引き入れたこと」を挙げ、李鴻章は「長期にわたって直隸総督をつとめ、親貴の醇親王や慶親王との関係を活用し、次第に北洋における軍事・政治の実権を握った」\*141と云う。さらに、

清廷は、湘軍が大きくなりすぎて制御できなくなることを心配したが、淮軍に対しては全幅の信頼を寄せ〔信任無間〕、畿輔に駐軍することを許した。李鴻章は上奏して、淮軍の大將である張樹声、劉銘伝、潘鼎新、劉秉璋らを総督・巡撫に任命すること、淮軍の幕僚を顕要な地位に抜擢することを願い出た。淮軍の諸大將はみな実缺の提督・総兵〔提鎮〕になった。同窓に事あれば、ただちに淮軍に負担させた。淮軍は全国諸軍のなかで主導的な地位を確かなものにした\*142。

岡本隆司氏は、「淮軍をひきい直隸総督に任じた李鴻章は、首都に近い天津に駐在し、また同時に先進地域の江南もおさえていたから、かれが清朝全体の政治を切り盛りしていたようにみえる。けれども制度上は、あくまで一地方官にすぎない。むしろ全土に影響をおよぼす地方官の施策を、西太后・中央がおおむねオーソライズし、李鴻章に多方面で手腕をふるわせていたことが重要なのである」\*143と述べている。また、李鴻章が天津機器局を引き継ぎ拡充したことにふれて、「これは1870年代から漸次、淮軍の主力を天津方面に移したという事情も作用している。李鴻章はこうして自らの地盤に、必ず兵器工場を設け、駐屯する淮軍に補給できるようにはかった」\*144と指摘する。李鴻章はどのように朝廷の信頼を勝ち取ったのか、曾国藩との違いはどこにあったのか、「北洋」と呼ばれるようになった李鴻章の軍隊は、依然として江南を命脈としていたのか、などの問題を今後の課題としたい。

#### 〈注〉

- \*1 曾国藩の日記には、夢の話がときどき出てくるが、書家としても知られる劉墉（1719-1804年）に会った夢はおもしろい。「劉文清公〔劉墉〕の夢をみた。長いこと相手になり〔周旋〕、たくさん話した。すべて忘れたが、字を書くときに、純羊毫をつかうのか、純紫毫を使うのか訊ねたことだけ憶えている。文清は、某年某所で道員に着任したとき、某店の筆が書きやすかったと答えた。夢のなかではその店の名をはっきりと憶えたのだが、目覚めたらこれも忘れてしまった」（『曾国藩全集』日記（三）岳麓書社、1995年、1539頁、同治7年8月初4日）。以下、『曾国藩全集』については、出版社と出版年を省略する。すべて「岳麓書社、1995年」である。
- \*2 『曾国藩全集』日記（二）1331頁、同治5年12月24日。
- \*3 「致郭嵩燾（同治4年5月12日）」『曾国藩全集』書信（七）5037頁。
- \*4 「復陳艾（同治6年正月初3日）」『曾国藩全集』書信（九）6183頁。曾国藩には様々な自称があり、訳に反映しないものもあるが、「鄙人」などは小生と訳した。
- \*5 『曾国藩全集』は、1984年から分冊が刊行され、1994年に完結した。唐浩明氏によれば、「曾氏

故居・富厚堂に100年近く所蔵され、湖南図書館で30年保存された私家檔案」を完全な形で公開したのが『曾国藩全集』であり、10年の歳月の間に「この全集に命の最後の歳月を捧げた湘潭大学の6人の学者」が世を去ったという。また、「全集の各分冊が陸続と出されるのにつれて、曾国藩というすでに忘れられたような歴史人物が、あらたに人々の強い関心を引き起こし、「曾国藩現象」ともいうべきものが生じた（唐浩明「後記」『曾国藩全集』書信（十）7615-7616頁）という。中国共産党が太平天国の革命的意義を称揚した時代、それを鎮圧した清朝の大官は、つまらぬ反動的人物として歴史の片隅に追いやられていたのであろう。曾国藩は、帰郷して古文を書き、都にいたころの素志を全うすることは「今生ではかなわないだろう」（「論紀沢（同治8年3月初3日）」『曾国藩全集』家書（二）1354頁）と述べ、自分の死後、古文は「発刻して人におくってはならない。篇幅が少ないばかりでなく、少壮に努力せず、志は高いが才がそれにおいつかず、刻してはその陋を彰らかにする」（「論紀沢紀鴻（同治9年6月初4日）」『曾国藩全集』家書（二）1370頁）と二人の息子に命じている。「夢で、試験場で試験を受けている。無味乾燥で筆をおろせない、完成できない、焦急の至り、驚いて目を覚ました。読書して科挙に受かり、官等を極めたが、学術に何一つ成すことなく、答案も完成できないさまである。恥じ嘆いてやまない」（『曾国藩全集』日記（三）1720頁、同治9年1月27日）と曾国藩は日記のなかでも嘆いている。『全集』の大部分を構成するのは、奏稿・日記・手紙である。曾国藩が遺した、それら達意の文章を読むと、中国語に新たな地平を開いたという思いを抱く。「奏稿」は、曾国藩の上奏文の控えである。「日記」について、曾国藩が日記をつけるのを「清理文件」と称している（『曾国藩全集』日記（三）1906頁、同治10年10月3日）ように、日々の仕事の記録という意味合いが強かった。また、毎月一度日記を送り、「両弟に私の足跡を知らせる」（「致澄弟沅弟（同治5年3月初6日）」『曾国藩全集』家書（二）1246頁）、「10日ごとに日記を手紙とともに弟の役所に届ける。毎月4日には専勇が手紙と日記を湘郷に届ける。そうすれば両方とも私の起居を詳しく知ることができる。（中略）私の日記は小を詳細に、大を簡略に書いてある」（「致沅弟（同治5年5月初3日）」『曾国藩全集』家書（二）1256頁）といった記述からわかるように、日記には、弟たちに読ませるといった目的もあった。たとえば曾国藩の幕僚の一人である趙烈文の日記（『能静居日記』）には自由な「私人」の日記としての面白さがあるが、曾国藩は骨の髄まで「公人」である。「家書」は家族に出された手紙であるが、そのほとんどが2人の弟か2人の息子（曾紀沢・曾紀鴻）にあてて書かれている。曾国藩には弟が4人いたが、そのうち曾国華は安徽省三河鎮で戦死、曾国葆（曾貞幹と改名）は南京雨花台の軍中で病没、と2人を太平軍との戦いで亡くしている。それ以後に書かれた家書は、曾国潢と曾国荃に向けて書かれている。2人の弟が別々の土地にいても、「われわれ兄弟3人の手紙には、互いに見ないものはない、やはり1本にしたほうが良い」（「致澄弟沅弟（同治10年4月初1日）」『曾国藩全集』家書（二）1404頁）と、同じ手紙を読ませていた。湖南省湘郷県に残る曾国潢、軍功により高官としての道を歩み始めた曾国荃と良好な関係を維持することに曾国藩は心を砕いた。兄弟のあいだで秘密を持ちたくなかったらしい。「書信」は家族以外の人間に対して書かれた手紙の控えである。もちろん誰が読むかによって多少の斟酌はあるが、それは意外なほど目に付かない。ほとんど同じ文面の手紙も多く、その時々曾国藩の一番の関心事が、定型化した文で綴られている。頻繁に手紙をやりとりする人と、久しぶりの人とでは、当然書かれた内容が違い、後者は長期の出来事のダイジェストの様相を帯びる。一本の手紙だけでは不明瞭だった意味が、別の手紙を読むとはっきりすることもある。鮑超への手紙などは、言いづらいうような内容も、遠慮なく、教え諭すように書かれている。曾国藩は李昭慶への手紙では、軍営は慌ただしく、「楷書を書く暇は絶対ない」ので「行書、あるいはなぐり書きの草書〔狂草〕」で書くように指示しており、ときには「幕友に代書させ、そのあとに自分で数字書く」こともあるが、李鴻章との往復書簡は「すべて親筆の行書・草書である」（「復李昭慶（同治5年2月初5日）」『曾国藩全集』書信（八）5598頁）と述べている。李鴻章への手紙にも幕友に草稿を書か

- せたものがあるが、自分で「改めたところが多く、やはり自分で書いたほうが直接である」(「加李鴻章片(同治6年8月22日)」『曾國藩全集』書信(九)6410頁)と曾國藩は記している。やはり李鴻章への手紙はおもしろい。
- \*6 清水稔『曾國藩 天を恐れ勤・儉・清を全うした官僚』山川出版社, 2021年, 72頁。
  - \*7 王盾『湘軍史』岳麓書社, 2014年, 18頁。
  - \*8 たとえば李鴻章とは、南京奪回後最初の江南郷試のさい(『曾國藩全集』日記(二)1069頁, 同治3年10月17日)、徐州での两江総督の交替時(『曾國藩全集』日記(三)1342頁, 同治6年正月15日)、曾國藩が直隸総督として北上し、李鴻章が湖広総督として武漢に向かうとき(「復朱学勤(同治7年11月初4日)」『曾國藩全集』書信(九)6694頁。『曾國藩全集』日記(三)1565頁, 同治7年10月26日)、天津で直隸総督を交替したさい(『曾國藩全集』日記(三)1777頁, 同治9年8月25日)などに面会している。
  - \*9 「復李鶴年(同治5年10月30日)」『曾國藩全集』書信(八)6017頁。
  - \*10 「復尹耕雲(同治5年11月29日)」『曾國藩全集』書信(八)6068頁。
  - \*11 朱金甫・張書才主編, 李国栄副主編『清代典章制度辞典』中国人民大学出版社, 2011年, 672, 717-718頁。
  - \*12 孫文良・董守義主編『清史稿辞典』山東教育出版社, 2008年, 2085, 2163頁。
  - \*13 黎庶昌撰, 李瀚章審定, 梅季校点「曾國藩年譜」黎庶昌, 王定安等編撰『曾國藩年譜(附事略榮哀録)』岳麓書社, 2017年, 卷九, 170頁。
  - \*14 「近日各路軍情併擬裁撤湘勇一半及曾國荃因病意欲奏請開缺回籍片(同治3年7月20日)」『曾國藩全集』奏稿(七)4268頁。
  - \*15 「復張亮基(同治4年3月初1日)」『曾國藩全集』書信(七)4957頁。
  - \*16 「復李鴻章(同治3年9月25日)」『曾國藩全集』書信(七)4755-4756頁。
  - \*17 「与潘曾璋(同治3年8月初6日)」『曾國藩全集』書信(七)4662頁。「老湘營」(「老湘軍」とは、「湘軍の大小の軍系のなかで、軍史が最も長く、戦績が最も顕著で、湘軍と盛衰を終始ともにした」軍であり、王鑫(1825-1857年)が曾國藩・羅沢南から独立して創建したものである(前掲『湘軍史』358-359頁)。同治8年、劉松山率いる湘勇の部隊が「綏徳の変」を起こしたとき、御史・宋邦徳が、次のように上奏した。「陝西省の湘勇が叛乱据城、さらに統帯官を殺害しており、従来の欠餉騒ぎとは様子が違います。(中略)ある人がいうには、湘勇は以前は江南におり、同じく水郷であり、風土は相習、かつ江南はもとより繁華であり、賊が略奪したものは山のようでした。一城占領すると、その欲をほしいままに満たしました。そこでみな喜んで命を捧げました。いま陝甘は、地はやせ民は貧しく[地瘠民貧]、兵燹の余、地方はさらに苦しく、糧食はしばしばつづかず、戦勝しても得るものは少なく、このために失望した[缺望]のです。離叛の理由はこういうことでないとも限りません」(「附録廷寄 着左宗棠詳察陝西營勇變乱事件(同治8年3月14日)」『曾國藩全集』奏稿(十)6223頁)。曾國藩は相当に心外だったようで、劉松山の「老湘營は規律はもとより厳整、勇丁に乱を好み禍を樂しむ者は決してそう多くないと思います。綏徳の変があったのは、主將が遠く離れており、会匪が挑発[起衅]し、彈圧が良くなかったためであり、その原因を推測すれば、実に、軍士が長く労苦にあり、帰りたいと思っていたためです。(中略)御史・宋邦徳が上奏した地瘠缺望の説ですが、老湘營にはこのような弊もありません」と反論し、同治5年冬、「諸將はみな陝西・甘肅を苦にしており、湘軍の西行は迅速にはいかないだろうと思っておりましたが、劉松山は檄調を受けるやいなや、袂を投げて起ち、全く難色がありませんでした。その營の勇丁もみな感激して命を惜みせず、地瘠缺望の者がいたとは聞きません」(「遵旨籌議劉松山所部老湘營未可撤遣摺(同治8年5月初4日)」『曾國藩全集』奏稿(十)6301頁)とも述べている。老湘營の「綏徳の変」にも哥老会が関与しており、「陝西綏徳州城の湘軍・劉松山の軍[部]で兵變が起きた。兵變の發動者である謝永青、唐太春は以前湖北の軍營で哥老会に加入[結拜]していた」(邵雍『中国近代会党

- 史』合肥工業大学出版社, 2009年, 75頁)。
- \*18 「復李鴻章(同治4年閏5月初7日)」『曾國藩全集』書信(七)5084頁。
  - \*19 「致沅弟(同治3年8月14日)」『曾國藩全集』家書(二)1163頁。
  - \*20 「致沅弟(同治3年8月初5日)」『曾國藩全集』家書(二)1160頁。
  - \*21 「復李鴻章(同治3年9月25日)」『曾國藩全集』書信(七)4756頁。
  - \*22 田玄・皮明勇主編『湘軍』山西人民出版社, 2000年, 315頁。
  - \*23 「処理清發同治三年六月前湘軍欠餉報銷片(同治6年2月初8日)」『曾國藩全集』奏稿(九)5565頁。
  - \*24 「再陳裁撤湘勇及訪查洪福瑱下落尚無端倪片(同治3年7月29日)」『曾國藩全集』奏稿(七)4271頁。
  - \*25 「附錄廷寄 飭令認真籌辦江寧善後各事(同治4年3月17日)附御史朱鎮摺抄件」『曾國藩全集』奏稿(八)4784-4786頁。
  - \*26 「再陳裁撤湘勇及訪查洪福瑱下落尚無端倪片(同治3年7月29日)」『曾國藩全集』奏稿(七)4271-4272頁。
  - \*27 「遵旨查明未墾荒地難以試辦屯田摺(同治10年11月29日)」『曾國藩全集』奏稿(十二)7423-7425頁。
  - \*28 帰郷の途上で、必要な省で留用してはどうかという案もあった。同治3年9月の上諭には、「まだ解散していない勇は、原管将官に統率させて帰郷させる。勇を募集している省を通れば留めて使う、さもなくば必要とする省に送る。このようにすれば、沿途で擾累の心配がなく、各省が少しずつ招募する面倒も避けられ、一挙兩得である。募勇各省がすべて留用できなければ、原籍に連れ戻って解散〔遣散〕する。隨地遣散とくらべると適切であろう。」「(附錄廷寄 確查幼輔諸逆下落及斟酌裁撤勇丁事宜併金陵一軍移師皖北会剿楚皖交界竄匪(同治3年9月初9日)」『曾國藩全集』奏稿(七)4388頁)と書かれている。必要な省に譲ってはどうかという案もあった。貴州巡撫・張亮基が譲り受けたいと願い出たのを受け、同治4年2月、曾國藩は「楚勇を解散〔遣撤〕すると上奏してきたが、人員を派遣して酌帶させて貴州に行かせ、張亮基のもとに調遣することはできないか」と下問されている。」「(附錄廷寄 着籌遣撤之楚勇能否派赴黔省及各省釐金能否分撥濟黔(同治4年3月初2日)」『曾國藩全集』奏稿(八)4755頁)。
  - \*29 前掲『中国近代会党史』72頁。
  - \*30 前掲『中国近代会党史』74, 79頁。
  - \*31 前掲『湘軍』288頁。
  - \*32 鮑超は、湖南省の衡州で湘勇が誕生したとき、楊載福(のちに楊岳斌と改名)の營に加わった。咸豊6年に3000人を新たに募って、霆軍と称した。咸豊9年に増募して1万人となり、曾國藩に隸属するようになった。同治元年には浙江提督に任命されている。鮑超については、前掲『湘軍史』337, 342頁を参照。
  - \*33 湖北省武昌府江夏県の西南部に金水が流れ、金口で長江に注ぐ(趙爾巽等撰『清史稿』中華書局, 2003年, 卷67, 2170頁)。陸家嘴については不祥だが、「嘴」とはくちばしのように突き出た地形を指すので、金口のそうした地形の地名かと思われる。
  - \*34 前掲『湘軍史』137頁。
  - \*35 「致澄弟沅弟(同治4年4月15日)」『曾國藩全集』家書(二)1190頁。金口叛勇は太平天国の殘党〔髮〕に投じようとしたが、「汪〔海洋〕・李に納れられなかった。」「(復楊岳斌(同治4年6月29日)」『曾國藩全集』書信(七)5237頁)。前掲『湘軍史』には「太平軍・汪海洋の部隊と合して」(137頁)と書かれている。かつて太平軍と戦った部隊が、太平軍に合流しようとしていたことがわかる。
  - \*36 「復喬松年(同治4年5月17日)」『曾國藩全集』書信(七)5049頁。
  - \*37 「陳明霆營餉細情形片(同治4年5月初1日)」『曾國藩全集』奏稿(八)4830頁。



- \*38 前掲『中国近代会党史』74頁。
- \*39 前掲『中国近代会党史』73-74頁。
- \*40 「復張之万（同治7年5月初10日）」『曾國藩全集』書信（九）6609頁。
- \*41 「復吳坤修（同治7年5月16日）」『曾國藩全集』書信（九）6616頁。
- \*42 「復林鴻年（同治4年閏5月18日）」『曾國藩全集』書信（七）5109頁。
- \*43 「查辦徽休關餉勇丁併將獲咎營官定擬摺（同治4年11月27日）」『曾國藩全集』奏稿（八）5049-5050頁。邵雍氏もこの事態にふれて、「湘軍の、安徽休寧に駐防していた金國琛部、徽州の唐義訓部であいついで鼓噪索餉の兵変が起きた。哥老会の『巨魁』で都司の龍家寿が軍營で、（中略）会衆を發展させた」（前掲『中国近代会党史』74頁）と書いている。
- \*44 「復程桓生（同治4年6月22日）」『曾國藩全集』書信（七）5213頁。
- \*45 「復劉坤一（同治6年12月初8日）」『曾國藩全集』書信（九）6499頁。
- \*46 西太后が、「鮑超の旧部は解散〔撤〕したのか？」と訊ねたのに対し、曾國藩は「すべて解散しました。もともと8千・9千おりましたが、今年の4月に5千解散し、8、9月に臣が直隸に任命されましたとき、騒ぎを起こすのを恐れ、この4千をすべて解散しました」と答えている（『曾國藩全集』日記（三）1585頁、同治7年12月16日）。
- \*47 「復劉坤一（同治7年9月初2日）」『曾國藩全集』書信（九）6668頁。
- \*48 「加黃倬片（同治7年6月17日）」『曾國藩全集』書信（九）6634頁。
- \*49 「復何璟（同治7年9月初10日）」『曾國藩全集』書信（九）6674頁。
- \*50 「致澄弟（同治5年7月初6日）」『曾國藩全集』家書（二）1270頁。
- \*51 「復郭嵩燾（同治5年12月初5日）」『曾國藩全集』書信（八）6073頁。
- \*52 「加李榕片（同治7年3月14日）」『曾國藩全集』書信（九）6564頁。
- \*53 「復楊昌濬（同治9年正月24日）」『曾國藩全集』書信（十）7031頁。
- \*54 「復劉崑（同治6年7月15日）」『曾國藩全集』書信（九）6382頁。
- \*55 前掲『中国近代会党史』77-78頁。
- \*56 たとえば、「わが湘の哥老会には公然たる謀叛の意がある。悪むべし、畏るべし」（「致沅弟（同治5年7月初3日）」『曾國藩全集』家書（二）1269頁）。「湘郷哥老会があつまって事を起こしている」（「論紀沢（同治6年5月17日）」『曾國藩全集』家書（二）1339-1340頁）。「このほか心配なのは哥老会が一番である。我郷で軍營で大官にまで保挙されたものは、往々にして豊衣美食、広交濫用、費資用罄、ふたたび出て日に向かうごとく、財を求め官を求めることの容易なことを思うが、得られない」（「加黃倬片（同治7年6月17日）」『曾國藩全集』書信（九）6634頁）。「湘郷で哥匪が擾乱を主唱していることを知った」（『曾國藩全集』日記（三）1731頁、同治9年3月初5日）あと、「哥老会はすでに撲滅されたことを知って、安心した」（『曾國藩全集』日記（三）1732頁、同治9年3月9日）。「湘潭、湘郷、衡山の哥老会が騒ぎを起こし、とくに猖獗だと聞く。焦慮にたえない。沅弟が隊を率いて討伐にいき、ちょっと敗れたときもきいた。とくに憂灼する」（『曾國藩全集』日記（三）1795頁、同治9年10月23日）。「弊省の哥老会匪が事を起こし、〔湘〕潭・攸・醴〔陵〕・衡〔州か〕などではいずれも騒ぎがあった。（中略）非常に隠慮している」（「復李瀚章（同治9年閏10月28日）」『曾國藩全集』書信（十）7327頁）。
- \*57 「復黃翼昇（同治10年6月初9日）」『曾國藩全集』書信（十）7467頁。
- \*58 「復譚鍾麟（同治10年5月初7日）」『曾國藩全集』書信（十）7438頁。
- \*59 劉崑、雲南省景東人、道光21年庶吉士、戸部右侍郎、湖南巡撫を務める（錢実甫編『清代職官年表』中華書局、1997年、3260頁）。
- \*60 「復楊昌濬（同治10年5月11日）」『曾國藩全集』書信（十）7446頁。
- \*61 「復劉崑（同治6年3月13日）」『曾國藩全集』書信（九）6251頁。
- \*62 「復李宗羲（同治5年8月25日）」『曾國藩全集』書信（八）5902頁。
- \*63 『曾國藩全集』日記（三）1915頁、同治10年10月25日。

- \*64 「致澄弟（同治5年8月初10日）」『曾國藩全集』家書（二）1275-1276頁。
- \*65 「加朱萸片（同治6年8月12日）」『曾國藩全集』書信（九）6408頁。
- \*66 「復李瀚章（同治10年11月21日）」『曾國藩全集』書信（十）7582-7583頁。
- \*67 「復劉崑（同治6年5月24日）」『曾國藩全集』書信（九）6335-6336頁。
- \*68 梁啓超著，張美慧訳『李鴻章 清末政治家悲劇の生涯』久保書店，1987年，107-108頁（梁啓超『李鴻章伝』江蘇人民出版社，2020年，41-42頁）。僧格林沁の馬が多数捻軍の手に渡ってしまった（「復郭嵩燾（同治5年正月22日）」『曾國藩全集』書信（八）5589頁）。
- \*69 王盾『淮軍史』岳麓書社，2017年，21頁。捻軍討伐に自分が率いたのは、「湘勇9千人，淮勇2万2千人」であった（「致澄弟沅弟（同治4年5月15日）」『曾國藩全集』家書（二）1193頁）と曾國藩は書いている。当初は「淮軍の銘〔劉銘伝の軍〕・盛〔周盛波の軍〕・鼎〔潘鼎新の軍〕・樹〔張樹声の軍〕の4軍は全部で27000人，このほか，湘軍・老湘軍・江督親軍の張詩日の軍あわせて8000人，湘淮軍聯軍合計で35000人であった」（前掲『淮軍史』21頁）と王盾氏は述べており，この数は曾國藩の記述に近い。
- \*70 前掲『淮軍史』19頁。
- \*71 前掲『淮軍史』20頁。
- \*72 「遵旨赴山東剿賊併陳万難迅速縁由摺（同治4年5月初9日）」『曾國藩全集』奏稿（八）4839頁。
- \*73 「加李瀚章片（同治4年8月23日）」『曾國藩全集』書信（七）5303頁。
- \*74 「復彭毓橘（同治5年9月11日）」『曾國藩全集』書信（八）5927頁。
- \*75 「再請取回節制三省成命片（同治4年閏5月11日）」『曾國藩全集』奏稿（八）4905頁。
- \*76 「遵旨復陳併請勅中外臣工會議剿捻事宜摺（同治4年7月24日）」『曾國藩全集』奏稿（八）4965頁。
- \*77 「復官文（同治4年正月初4日）」『曾國藩全集』書信（七）4890頁。
- \*78 「復官文（同治4年12月23日）」『曾國藩全集』書信（七）5479頁。
- \*79 「復劉崑（同治5年9月19日）」『曾國藩全集』書信（八）5951頁。
- \*80 曾國藩が山西巡撫に任命されたとき，曾國藩はさまざまな心配をしているが，食習慣の違いについても，「南人は面食になれていない。山西はとくに米が買えず，直隸や山東〔直東〕が海や運河でなんとかするのは違う」と弟たちに書き送っている（「致澄弟沅弟（同治4年6月24日）」『曾國藩全集』家書（二）1202頁）。
- \*81 「遵旨復陳併請勅中外臣工會議剿捻事宜摺（同治4年7月24日）」『曾國藩全集』奏稿（八）4965頁。
- \*82 「復李鴻章（同治4年7月15日）」『曾國藩全集』書信（七）5256頁。
- \*83 「復馬新貽（同治4年8月13日）」『曾國藩全集』書信（七）5281頁。
- \*84 「復劉長佑（同治4年6月18日）」『曾國藩全集』書信（七）5198頁。
- \*85 たとえば「湘勇はひさしく強弩の末に同じく，淮勇はなお研ぎ立ての刃物のようである」（「復蘇廷魁（同治4年11月29日）」『曾國藩全集』書信（七）5428頁）。
- \*86 「復李鶴章（同治4年2月初3日）」『曾國藩全集』書信（七）4940頁。
- \*87 「復李鴻章（同治4年5月初4日）」『曾國藩全集』書信（七）5025頁。
- \*88 「致李鴻章（同治3年9月初4日）」『曾國藩全集』書信（七）4734頁。
- \*89 「皖軍被困派兵援剿摺（同治4年閏5月11日）」『曾國藩全集』奏稿（八）4904頁。
- \*90 「病難速痊請開各缺仍留軍中効力摺（同治5年10月13日）」『曾國藩全集』奏稿（九）5395-5396頁。
- \*91 「復蘇廷魁（同治4年11月29日）」『曾國藩全集』書信（七）5428頁。
- \*92 「加李瀚章片（同治4年11月初3日）」『曾國藩全集』書信（七）5404頁。
- \*93 「復陳鼎（同治4年8月18日）」『曾國藩全集』書信（七）5285頁。

- \*94 「致沅弟（同治5年11月21日夜）」『曾国藩全集』家書（二）1302頁。
- \*95 「従来、諸将に対するに誠を以てし、片語も人を欺かず、人の官階を保することではなく、成人美名を重んじてきた。淮軍諸将もまた次第に私の性情を知り、私の教訓を好む〔楽〕ようになってきた。ただ湘軍は年に全餉を与えられ、淮軍は10閏に満たない、不公平〔厚薄不均〕で、気にかかって仕方がない。閣下に、なんとかして増やし、この失を弥縫してもらえたら、非常にありがたい」（「復李鴻章（同治5年4月21日）」『曾国藩全集』書信（八）5690頁）と曾国藩は李鴻章に頼んでいる。李鴻章が淮勇より湘勇を優遇していたのも、曾国藩にとって淮勇を厳しく指導しづらい原因の一つであった。「閏」には、兵士の給料、あるいはその支給日の意がある。
- \*96 「加李瀚章片（同治5年5月27日）」『曾国藩全集』書信（八）5802頁。
- \*97 「加李鴻章片（同治6年5月28日）」『曾国藩全集』書信（九）6341頁。
- \*98 「致李鴻章（同治5年3月初9日巳刻）」『曾国藩全集』書信（八）5650頁。
- \*99 「王鑫は性格が明朗で傲慢、駱秉璋巡撫の知遇を得て軍を拡大した。しかし曾国藩の用人の道は、傲慢な者にはしばしば恩威併用で従わせた〔截仰就範〕。鮑春霆〔鮑超〕、王明山〔湘軍水師〕、蕭啓江〔字は浚川〕は性情が王と似ていたが、いずれも曾国藩によって使われて功を挙げた。しかし王鑫は傲慢で制約を受けず、ついに功は阻まれた」（前掲『湘軍史』359-360頁）。
- \*100 「復李鴻章（同治5年7月18日）」『曾国藩全集』書信（八）5861-5862頁。
- \*101 「致郭嵩燾（同治4年5月12日）」『曾国藩全集』書信（七）5038頁。
- \*102 「復李鴻章（同治6年5月27日）」『曾国藩全集』書信（九）6339頁。
- \*103 「復李瀚章（同治6年3月20日）」『曾国藩全集』書信（九）6278頁。
- \*104 「復朱萃洲（同治6年9月15日）」『曾国藩全集』書信（九）6435頁。
- \*105 「復劉崑（同治4年12月初9日）」『曾国藩全集』書信（七）5455頁。
- \*106 「籌商直隸河防片（同治4年10月11日）」『曾国藩全集』奏稿（八）5016頁。
- \*107 「復李鶴年（同治5年10月30日）」『曾国藩全集』書信（八）6016-6017頁。
- \*108 「復李鴻章（同治5年11月18日）」『曾国藩全集』書信（八）6048-6049頁。
- \*109 「復方鼎銳（同治5年12月初7日）」『曾国藩全集』書信（八）6088頁。
- \*110 『曾国藩全集』日記（三）1343頁、同治6年正月19日。
- \*111 「復李瀚章（同治6年正月26日）」『曾国藩全集』書信（九）6209-6210頁。
- \*112 「復彭玉麟（同治6年2月初4日）」『曾国藩全集』書信（九）6217頁。
- \*113 「致沅弟（同治6年正月26日）」『曾国藩全集』家書（二）1322頁。
- \*114 「復李瀚章（同治6年6月初2日）」『曾国藩全集』書信（九）6347頁。
- \*115 「復李鴻章（同治7年8月初2日）」『曾国藩全集』書信（九）6663頁。
- \*116 前掲『清代職官年表』683頁。
- \*117 「議汰兵疏（咸豐元年3月初9日）」『曾国藩全集』奏稿（一）20-22頁。
- \*118 「復喬松年（同治3年11月初9日）」『曾国藩全集』書信（七）4825頁。
- \*119 「會議長江水師營制事宜摺（同治4年12月28日）」『曾国藩全集』奏稿（八）5095-5096頁。
- \*120 前掲「曾国藩年譜」『曾国藩年譜』卷十一、205、208頁。
- \*121 『曾国藩全集』日記（三）1584頁、同治7年12月14日。
- \*122 『曾国藩全集』日記（三）1585頁、同治7年12月16日。
- \*123 『曾国藩全集』日記（三）1604頁、同治8年正月17日。直隸総督の任を李鴻章に引き継いだあとの同治9年9月27日にも、西太后に召見され、「直隸でどれほど練兵したか」と問われた曾国藩は、「新兵3000を練兵しました。前任の総督・官文は旧章の兵4000を練兵しましたので、合計7000です。もう3000練兵すれば1万になります。すでに李鴻章と相談〔商明〕しました。臣の奏定した章程にもとづいて処理します」（『曾国藩全集』日記（三）1787頁、同治9年9月27日）と答えている。
- \*124 「復傅振邦（同治8年8月11日）」『曾国藩全集』書信（九）6816頁。

- \*125 「復傅振邦（同治8年10月27日）」『曾國藩全集』書信（十）6966頁。
- \*126 「復錢応溥（同治8年10月28日）」『曾國藩全集』書信（十）6968頁。
- \*127 「致丁日昌（同治9年正月24日）」『曾國藩全集』書信（十）7029頁。
- \*128 「復傅振邦（同治9年3月13日）」『曾國藩全集』書信（十）7083頁。
- \*129 「復朱学勤（同治8年9月20日）」『曾國藩全集』書信（十）6931頁。
- \*130 「略陳直隸應辦事宜併請酌調人才酌撥銀兩摺（同治8年正月17日）」『曾國藩全集』奏稿（十）6186-6187頁。
- \*131 「酌定營制辦理練軍事宜摺（同治9年4月16日）」『曾國藩全集』奏稿（十二）6883頁。
- \*132 「復李鴻章（同治9年正月16日）」『曾國藩全集』書信（十）7019頁。
- \*133 「復奕訢等（同治9年6月初2日）」『曾國藩全集』書信（十）7204頁。
- \*134 「截留福建漕米二万石留備各軍米片（同治9年7月初9日）」『曾國藩全集』奏稿（十二）7010頁。
- \*135 「復彭玉麟（同治9年11月初1日）」『曾國藩全集』書信（十）7335頁。
- \*136 張錫嶸は殉難してしまった（「復洪汝奎（同治6年正月22日）」『曾國藩全集』書信（九）6205頁）。
- \*137 「復李昭慶（同治5年9月21日）」『曾國藩全集』書信（八）5956頁。
- \*138 「復李鴻章（同治5年9月26日）」『曾國藩全集』書信（八）5965頁。
- \*139 前掲『淮軍史』20-21頁。
- \*140 前掲『湘軍史』11-12頁。
- \*141 前掲『淮軍史』25頁。
- \*142 前掲『淮軍史』30頁。
- \*143 岡本隆司『袁世凱 - 現代中国の出発』岩波書店，2015年，101頁。
- \*144 岡本隆司『李鴻章 - 東アジアの近代』岩波書店，2011年，128頁。

## Some Considerations on the Demobilization of the *Xiang* Army

Kaori Asanuma

After the fall of the Taiping Heavenly Kingdom, Zeng-Guofan, the victorious general commander, decided to demobilize his *Xiang* Army immediately. During the long war with the Taiping forces, the army's morale declined, and it was infested with a secret society called *Gelaohui*. The demobilization could save enormous expenses in maintaining the army, but it was an arduous task to make the men go home without revolt, for they had to be paid a huge amount of their outstanding salaries before dismissal. While handling this task, Zeng-Guofan had to suppress the *Nien* Rebellion. Having demobilized his own army, Zeng-Guofan was forced to command the *Huai* Army, which was rallied by Li-Hongzhang, his most trusted disciple. It was challenging for Zeng-Guofan to fight the *Nien* Rebels and he failed to achieve victory. The main reason for the failure was that he was dependent on officers and troops over whom he had never commanded. Li-Hongzhang took over his task, and Zeng-Guofan returned to the post of *Liangjiang* Governor-general and continued to manage the logistics given by Li-Hongzhang. After being appointed as *Zhili* Governor-general, Empress Dowager Cixi ordered Zeng-Guofan to discipline the Green Standards to make them strong enough to guard the capital area. His efforts to discipline them ended with the outbreak of the Tianjin Massacre. Li-Hongzhang succeeded to the post of *Zhili* Governor-general, and his *Huai* Army bore the defense of the capital area, leading to Li-Hongzhang's increasing military and political power.